

第48回 国際経済協力セミナー
東京外国語大学から世界銀行への道
講演者：石原 聡氏

世界銀行行 ヴィエンチャン事務所 上級社会開発官

文責：佐久間翔
草案作成：塚本英現



世界銀行ヴィエンチャン事務所で働かれている石原聡氏を招き、現在のキャリアに至るまでのお話を伺った。石原氏は東京外国語大学卒業で私たちの先輩にあたる。講演タイトルにあるように、外語生が世界銀行のような国際機関で働くにはどのような下積みが必要かをご自身の経験にからめて伺うことができた。

I 世界銀行で求められること

● 博士レベルの専門知識

➤ 世銀のスタッフのほとんどは博士か修士

現場では専門知識の有無が重視され、世界銀行は業界意識の高い人が多い世界である。意見を求められた際などに業界人らしい返答が出来ないと知識の無さを見透かされ、相手にしてもらえない場合もある。

➤ 途上国政府の（上級）担当官も、修士レベルが増えてきている
世界銀行における修士レベル担当官の人数の割合は高まってきている。専門性が重視されるこの世界で、修士レベルの専門知識は今後必須条件となるだろう。

● 応用力、判断力、説得力

➤ 相手国の、今の状況に最適の「解答」

世銀の仕事は、政策やプロジェクトを実際に実行するクライアントに対し支援・助言することであり、最も適したソリューションは時・場・状況により千差万別である。その判断を可能にするための応用力は、基礎をしっかりと勉強して身につけた高い専門性と、現場での経験を通じて得られたプロジェクトに対する深い理解により育まれる。従って、博士号を取り現場を経験した後で世銀に来ることがお勧めである。

➤ 立場が違えば、「正義」も「正解」も違う

我々が仕事をする世界は様々なアクターで構成されるため、意見の衝突は避けられない。対立軸(positioning)が複数存在すれば、conflictするのは当然のことである。肝心なのは共通項(high level objective:最上の目標)を認識して、妥協し合う事ができる説得力を持っているかどうか。

➤ 説得できなければ、正解も宝の持ち腐れ

どんなに合理的で最適な正解を打ち出すことに成功しても、それを実行に移すことが出来なければ何も生み出していないに等しい。関係者ひとりひとりと対話し、自分の意見に同意してもらえるような説得力は、多様性の蔓る現場において必要不可欠な能力である。

● 様々な文化・専門性の中でチームをまとめる力

世銀で働く上で、個々人がきちんとした専門性を身につけていることが大切である。それに加えより重要なのはチームをまとめ上げる力。さまざまな文化背景を持つ人たちでチームを組む国際機関である世銀では、無用な軋轢を生まずに個々人の長が最大限に生かせるように働きかけをする力が特に問われる。石原氏はチームリーダーとして若い人と仕事をする時、すべての業務をもれなく遂行するため、業務の意味合いやそれが将来のキャリアにどのように結びつくかをきちんと説明するようにしている。

● どの国際開発機関でも求められるものは同じ

国際開発機関にアプライする場合、エントリーは勤務地に対してではなく各ポストに対して行う。そのため勤務地はアプライ時点では未確定である。勤務地がどこであっても能力を発揮することが求められるという事は世界銀行に限られたことではない。そのことは是非念頭において頂きたい。

II 外大（学部）ですべきこと

● 石原氏の外大時代

➤ 入学の経緯と入学後

大学を選ぶ際は、香港の返還の時に現地でそれを体験できたら面白いだろうという思いから、東京外国語大学の中国語科へ進学。入学後は、社会科学の古典にあたるような本を徹底的に読んだ。また、大学内外の勉強会やシンポジウムに積極的に参加し、自分の意見を発信していた。

➤ 長期旅行

色々な場所へ旅行をしたが、アフリカではそれまで社会学などで学んでいた理論があまりにも通用せず、「なぜ彼らはこんなのだろうか？」と興味を惹かれ1年近く現地に滞在した。実際に街に出て自分の足で歩き、現実を目で見ることは、理屈の上で正しい事が必ずしも正しいとは限らない事を知る非常に良い経験となった。

➤ 30歳と35歳を目処にしたキャリアプラン

30、35歳にはインディペンデントに求められる、採用される価値のある人物でありたいと考え、自分のやりたいと考えた事を追求して活動していた。「自分の専門がしっかりあってテクニカルに強ければどこでもやっていける」という思いを持っていたため、大学卒業後1年ほどはいわゆる「就職活動」というものはしなかった。

● 外大の強みは何か

➤ 地域・国の知識と専門性を共に学ぶバランス

業務で必要となる専門知識とはいわゆる普通理論のことであり、一般解である。しかし実際の現場は必ずしも一般理論がそのまま通用することばかりではない事を心得ておかねばならない。その点、外大は一般的な専門知識だけでなく、ある一国にフォーカスして「一般」と「特殊・具体」両方の研究を行える。また、27言語の地域専攻が存在する外大では、専攻地域の研究と他地域専攻の学生との関わりを通しておのずと地域・国ごとの多様性に対する認識が強められるため、一般理論の枠組みで定義できない一国の特殊性に触れる事ができる。このように、普遍性と特殊性の両者に早い段階で触れる事が出来る点で外大はバランスが良い。このような理解は、国ごとの「最適解」を業務で考える上で非常に大切である。一点気をつけたいのは、地域や国の知識そのものが正解となるわけでは無いということ。このような知識を基礎として持つことでしっかりとした判断が可能になり、応用力が機能するのである。

➤ 英語に加えもうひとつの外国語

今や英語を理解し話せることはグローバルスタンダードな能力であり、「外国語」の能力としては強みとならない。外大では英語とは別の言語を専攻として学ぶ事ができ、新たなグローバルスタンダードの上でも外国語に精通した人材を生み出せる場である。

➤ 異文化との接触と軋轢・誤解への慣れ

異文化と接触する際は、軋轢や誤解に直面することがある。留学の機会にも恵まれ、キャンパス自体も国際色豊かな外大で積極的に異文化との接触を取って様々な不具合を経験すると、現場でそのようなものに直面しても混乱する事がない。

● 外大生（学部生）は何をすべきか

➤ 基本の習得（専門知識、国・地域の知識、異文化と付き合うことへの慣れ）

先述した通り、外大の環境を存分に活用して専門知識、国・地域の知識、英語に加えた外国語能力を習得すること。比較的留学の機会に恵まれているため、外国人と、外国で、リスクを伴う環境で付き合う経験をする事。

➤ 修士・博士へのベース作り

専門性を身につけるならば、学部を出ただけの知識では全く足りない。そこへ到達するためのベースとしての学業を、学部時代でしっかり修めることが望ましい。世界で通用する専門性は、博士・修士レベルがスタート地点であり、その学位を修めてやっとならば世界で通ずる「免許証」を得られることとなる。

➤ キャリアのベース作り

第一に、自分が30歳になった時にどうなっていたいのか考え、目標を明らかにし自分のやりたい事をする事。たくさん学び、色々なものを見て、色々な人と会って話をする事。第二に、自分のやりたいことはどのように、どの程度実現可能なのか考えておく事。そもそも自分がしたいことと、自分に向いていることは違うことが多い。また、自分がしたい事ができるような労働需要があるとも限らない。そのことをしっかり見極めて、いかにそれらのバランスをとっていくのか、あらかじめ考えておくことが望ましい。

III 今後、国際機関のキャリアを歩む外大生に向けて

● 20～30代が「ジャンプ」することのできる唯一の時期

「ジャンプ」する、つまり労働市場における自身の価値を向上させるために集中的に勉強することができるのは20～30代の時期に限られる。修士号を取得すれば、以前よりもアプライできる労働市場のレベルが圧倒的に変化する。学位はあくまで現場へ通じる「免許証」に過ぎないものの、あるかないかで大きな差が生じる。国際機関で活躍されたい皆さんも、是非とも時期を逃さず「ジャンプ」できるよう精進することをお勧めする。

● 外大生が「外に出る」道

将来国外でキャリアを築いて活躍したい場合、ルートは2本ある。一般人としてか、も

しくは専門家としてか。国際機関で活躍したい外大生には専門家として外に出ることが必要となるため、キャリアプランを考える上で是非念頭においていただきたい。

● **大きな失敗をしてしまった時には**

人間はどこかで必ず一度は大きな失敗をするもの。肝心なことは、そこで萎縮してしまわずに、次に同じミスを起こさないようアクティブに頑張ることができるか。今後様々な困難に直面することもあると思われるが、後輩である外大生の活躍に期待している。

講演は、世界銀行での業務、そして本学卒業生のキャリアについて詳しく知ることができる大変貴重なものであった。そのため、質疑応答もとても活発に行われ、本講演や世界銀行に関する質問だけでなく、どのように大学で得た語学というスキルを活かしていけばよいか、といった本学での学びとキャリアの関連についての質問も多くみられた。世界で活躍する本学中国語科卒業生である石原氏の姿は、ますます学生たちの国際協力というフィールドへの関心を向上させたであろう。